誰が『みやび』を定義するのか

―『伊勢物語』の海外流通と平安文化表象の形成―　（要旨）

GUILLEMOT Oriane（ギユモ・オリアンヌ）

10 世紀に成立した『伊勢物語』は、日本で長く注釈や再解釈の対象となり、その後、諸外国語への翻訳を通じて海外にも広まった。しかし、その流通は、意味の定まった作品をそのまま伝える営みではない。訳語の選択に加え、序文・注釈・叢書などの出版上の枠組みも、新たな読者に提示される作品像を形づくる。本発表では、こうした媒介が作品のいかなる側面を平安文化、ひいては日本文化の代表的特徴として位置づけてきたのかを問う。

この問題を考える手がかりとなるのが、一般に宮廷的な優雅さや洗練と結びつけられる「みやび」である。しかし、その理解は時代を超えて不変であったわけではない。Joshua Mostow が指摘するように、『伊勢物語』を「みやび」の文学と捉え、その美意識を日本文化の代表的な理念とみなす見方には、近代日本の文学批評による構築という側面がある。翻訳を通じて海外に伝わる「みやび」の意味そのものにも、解釈の歴史があるのである。分析の出発点は、初段末尾の「いちはやきみやび」という表現である。「みやび」に付された「いちはやき」には、性急さや激しさ、ときには行き過ぎを感じさせる含意がある。山本登朗もその否定的な語感に注意を促しており、語り手による若い主人公への評価を無条件の称賛と断定することはできない。優雅さと衝動性の緊張を、翻訳がどのように捉えるかは、「みやび」の理解の違いを検討する有効な手がかりとなる。

本発表では、1923 年から 2016 年に刊行されたロシア語・フランス語・英語の六つの翻訳を比較し、「いちはやきみやび」の曖昧さがどのように処理されてきたかを考察する。素早さや優雅さのいずれかを前面に出す訳がある一方、両者の結びつきを明示する訳もある。また、受容側の美的概念によって、原文の緊張が別の形に置き換えられる場合も考えられる。たとえば Gaston Renondeau のフランス語訳「élégance précieuse（凝った優雅さ）」は、洗練への称賛と気取りへの批判という、フランス語の「préciosité（プレシオジテ）」が持つ両義性を想起させる。ただし、それは原文の優雅さと性急さの対立と同一ではない。こうした差異を、より「正確な」翻訳への直線的な進歩として捉えることはできない。

さらに、各訳の序文や注釈、刊行された叢書にも目を向ける。翻訳本文が主人公の振る舞いに対する評価を組み替える一方、作品を取り巻く解説や出版制度は、『伊勢物語』のどのような性質を「日本の古典」として読者に提示するかに関わる。両者は関連しつつも、同一の働きではない。

第 21 回国際日本学コンソーシアムのテーマ「日本文化は誰のものか――表象・共有・盗用の交錯――」を踏まえ、本発表は「みやび」の意味を誰が定義し、その定義がいかに文化の代表像として流通するのかを考える。『伊勢物語』の海外流通を、既成の日本文化像の一方的な伝達ではなく、日本国内で形成された解釈と異なる言語・文化圏の読みが交錯し、新たな表象を生み出す過程として捉えたい。